

至：雲取山

喉が渴いたので
竜バミ谷へ下る

丹波山村

大洞山
(飛龍山)

前飛竜

ルートは推測

64歳単独。飛龍山はどこを下っても巻き道があると思い進むが、見つからない。いつしか残雪は消え、背丈もの濃い熊笹の中に入ってしまった。飛龍山へ戻ることは、しなかったため山中を8日間彷徨うことになった。

頂上からの下りで、方向さえ間違わなければ、巻き道がある。と思
い残雪を下る。残雪は巻き道を隠し、濃い熊笹の中へ案内する。おかし
いと思った時に、飛龍山まで戻り、地図とコンパスを使用し、下る方向
を確認すればよいのだが、道迷いはそれを許さない。携帯も通じない。
遭難3日後の夜に、ラジオで自分が遭難しているニュースが流れた。捜
索範囲は雲取山方面だったため、自分が救助される確率は少ないと判断
し、自力脱出を決意する。地図は持っていた。沢を下っている途中で、
ケガをしたため、大常木沢は危険と判断し、西側の斜面を登り返した。
なお、後日、救助隊員の方に「大常木沢は、沢登りで何人も亡くなって
いて、下るのは無理」と言われた。8日後に自力脱出し、無事に生還し
た。（本文参照）

遭難中に冷静で有り続けたことが、生還に繋がった。また、単独は孤
独感から冷静を失う場合が多いが、ラジオを持っていたことも役だった
と著者は分析されている。遭難の原因は、事前にしっかりと計画を
立てず、残雪が多かった誤算を現場対応できなかったことが要因であっ
たが、一番いけなかったのは、「頂上には何人も登山者がいたので、聞
けばよかったです、『なんとかなる』とナメてしまったのもまず
かった」と遭難者は語った。